

# レイジーマン・コーヒー物語

## その6

タイ州政府や郡庁では、「焼畑」についての理解が乏しく、カレン族の伝統的な農業「ク」における「火入れ」の意味を理解しようとしない。一方で、火の生態学的な再評価の動きは今、世界中で盛んになっている。デプヌたち若きカレン族のリーダーは研究者と組んで火を使った伝統的な農法の意義を訴え、またカレン型アグロフォレストリー（森林農業）による美味しいコーヒーを通して、人類全体に重要なメッセージを送り続けている。（文・辻信一）

▲ 家屋の周囲のフードフォレスト

## 火と土のエコロジー

ドイチャン・パペ村の人々は毎年、州政府や郡庁に赴いて、村人の生活が「ク」という伝統的な農業を土台にして成り立っているということとを説明し、交渉を行なう。その際に、いつも問題になるのが「焼畑」だ。「ク」における火入れの意味をいくら丁寧に説明しようとしても役人は聞く耳を持たない。「畑を燃やす」ということが、「部族民」の無知と非科学性を表わしているというわけだ。

これまでのところは、なんとか郡庁による黙認という形で「ク」はひっそりと継続できてきたが、いつ政府が弾圧に乗り出してくるか分からない。そもそも、中央政府の役人や政治家で、山岳先住民の自給的な農業などに関心を払う者はほとんどいない。実際、政府は一貫して、多品目を育てる粗放的で自給的な農業の代わりに、商品作物の単一栽培（モノカルチャー）を推奨してきたのだ。

そこへ、山の下方から入植者たちが徐々に上へ向かって移動するにつれ、山火事の危険も迫ってきている。

政府がカレン族の「焼畑」にますます厳しい目を向けたとしてもおかしくない。

これに対してパペ村は、一方で、政府や自治体よりもさらに意欲的で科学的な防災計画を立てて、対策に取り組んでいる。それが、「森の破壊者カレン」という偏見を振り払うことにもつながると村人たちは願っているのだ。今回の訪問でぼくたちも実際に、森のあちこちに造られたファイアーブレイク（防火帯）や消化用設備を見せてもらった。全て政府や自治体の助けなしに、村が独力でつくったものだという。デプヌは壁いっぱいの大きな航空写真を使って、このコミュニティによる防災システムの全体像を熱っぽく語ってくれた。



◀ 航空写真で森の防火計画を説明するデプヌ

ポール・ホーケン は次のように言っている。北部カリフォルニアのモノ族をはじめとする先住民族は、「まるで敵であるかのように火と闘う」のではなく、むしろ火を、大地の再生を支えるというきわめて重要な仕事におけるパートナーとして見ている」と。「このパートナーシップは先住民の暮らしに織り込まれていまず。土地と火は、文化と歴史から切り離せません」（同上）

## スローで内発的な発展

“森を破壊する焼畑”という名のもとに、「ク」を抑圧しようとする外からの圧力に対して、村をあげて対抗してきたパペ村の涙ぐましいほどの努力にぼくは感銘を受けた。農民運動と先住民運動のリーダーとして、長年レイジーマン・ジョニが言い続けたことの正しさが、ここにも表れている。先住民が森を守り、近代文明が森を破壊してきたのであって、決してその逆ではないのだ。

とはいえ、デプヌたち、カレンの若いリーダーたちは、単に民族の過去について語っているのではない。「ク」をはじめとする伝統をただ単に守り、残すこと自体が大事な

ではない。その中に示されている森とコミュニティ、自然と人間との共生の可能性を再発見することが大事なのだ。世界中で、農業や食産業が土壌の流失、生物多様性の減少、気候変動などを引き起こす主な原因と成り下がっている現状を変えていくために、先住民に伝わる知恵がきつと役に立つと彼らは確信し、本気で、そのモデルを提示しようとしているのだ。

村のなかを散策すると、いかにこの集落が、起伏の多い山中にあって、平地に乏しいかがわかる。比較的勾配の少ない場所を広場のようにしてその周りに家屋が建てられている。はるか下方の窪地には、水田も見えている。周囲の山はみな深い森に覆われている。

散策の途中で初老の男性が人懐っこい笑みを浮かべながら、狩猟用のパチンコ（スリングショット）を見せてくれた。これで鳥や小動物を獲るのだという。見よう見まねでぼくもやってみたが、これがなかなか難しい。撃つ瞬間に把手を持つ方の手を強くスナップさせないといけないのだ。案内役のカレンの若者たちによると、スリングショットは今も、

重要な生活道具の一つだという。また、罾猟も畑作業と並ぶ重要な仕事であり続けている。

自分の「ク」の畑を案内してくれたピダの家を訪ねた。外階段を上がったところが、縁側のように張り出していて、そこが居間のような空間であり、また仕事場でもあるらしいことがわかる。そこに置かれている手製の糸車にピダが座ってコットンを紡いでみせる。

◀ 自家製の糸車で糸を紡ぐピダ



焼畑は英語でスラッシュ・アンド・バーン、つまり「伐り倒して燃やす」という粗暴で無秩序な印象を与える言葉で表現されてきた。しかし、パペ村の「ク」における火入れのやり方で説明したように、実際の野焼きは、長年の経験知に基づいて火をしっかりと管理し、慎重にタイミングを見計らった上で行われる合理的なテクニックなのだ。土壌とその生態系に否定的な影響を与えないばかりか、逆に、その多様性や生産力を再生させ、高める。



▲ 家屋の周囲は、コーヒーを含むアグロフォレストリーの畑＝森

カウンターはあるが、その前に椅子はない。大声で呼ばれて、やっと店主が出てくる。コーヒーが飲みたいという、わかった、でもちよっと時間がかかるぞ、と言いながら、あまり気乗り

村そのものの沿革や生活文化、さらに、ぼくたちが村でデブヌたちから聞いたカレン型アグロフォレストリーに及ぶ。美味しいコーヒーを通して、その背後にある文化や生態の豊かさへと人々を誘っているわけだ。

「パカ」と呼ばれるパペ村のコーヒーは、香り高い森林農業によるいち早く取り組んできた。スウェーとノンタオ村の仲間たちはこれに見習いながら、飼料用トウモロコシ栽培の波から集落を守るための方法として、レイジーマン・コーヒーを育ててきた、というわけだ。

オーガニック・コーヒーとして、すでに定評を得ている。焙煎は村の中で行われても、販売はされていないので、ぼくたちは帰りに、山道から街道に出てすぐのパカ・コーヒー専用アウトレットに立ち寄った。それは売店の機能をもった、一種の広報ブースなのだが、コーヒーそのものについての説明はそのほんの一部にすぎない。展示は、



▲ 街道のアンテナショップ



▲ 「ク」のローテーションを説明するポスター



▲ 街道のアンテナショップの展示

▼ ピダ作の貫頭衣を身につけた同行のユキトくん



今彼女が紡いでいる綿花は、家と道のあいだにずっと並んだ2メートル以上もあるコットンの木から収穫されたものだ。そういえば、あちこちの家で、機織りをしている女性たちを何人か見かけたが、この村にはまだ、部分的にせよ、衣料、特に伝統的な貫頭衣の自給が残っていることがわかる。聞けば、自家用だけでなく、現金収入のためにもつくる。貫頭衣だけでなく、羽織、肩かけ、バッグなど、外の社会でも使えるような商品にもしつらえる。ピダはなかなかのデザイナーでもあるようで、同行した日本の若者たちも、ぼくも気に入った服を購入した。



▲ 日干しレンガ作り

広場のような場所で、若者たちが日干しレンガづくりに励んでいた。もともとのカレン族の伝統建築に日干しレンガはなかったはずだが、今ではこれが乾季の重要な共同作業なのだそう。

山の奥深くにひっそりと隠れ里のようにたたずむカレン族の集落の静けさは、しかし単なる停滞を意

ジワと浸透してきていることは明らかだ。

ゆっくりと変わり続けてきたこの村の変化はしかし、他の多くの村のように、ただ一方的に外側から加えられる強制的な力によって引き起こされた開発や発展という名の変化とはちがう、もつと穏やかでスローで内発的なプロセスだったようなの

味していない。質素な暮らしぶりの中にも、困窮とは明らかに違う、自足的な豊かさの感覚が漂っているようにみえる。とはいえ、パペ村の人々は近代的、現代的なものを拒否しているわけでもない。若者たちは、大都会に住む同世代と変わりなく、携帯やパソコンなどを駆使している。チェンマイという大都市に近いカレン族コミュニティのなかでは、例外的に衣食住の自給率が高いといわれるこの村でも、外の経済がジワ

だ。敵対的な力に押されて、森へと山へと逃げこんだと自認する人々が、ただ文明から逃げ続けるわけでも、単に伝統文化に固執するわけでもなく、自分たちなりの時代への適応を続けてきた結果が今、ここにある。

## コーヒーに乗せたメッセージ

自給的な経済を守る一方で、それを支えるためにも、現金収入の道を切り開くことが必要だ。そこで重要な役割を果たしているのが、コーヒーだ。村を歩くと、あちこちでコーヒーの木を見かける。例えばピダの家々の周囲のように、日当たりのいい側に菜園やコットンの木が、裏側の木立のなかにはコーヒーの木があるという具合だ。

スウェーによると、このパペ村こそ、コミュニティ・ビジネスとしてコーヒーの栽培とブランド化を手がけた先駆けで、カレン族にとって見習うべき模範のような存在なのだという。失われつつある「ク」を中心とする伝統的なアグロフォレストリー（森林農業）を守ろうとしてきたパペ村では、そのための一つの手段として、コーヒー栽培とその商品化に

有機栽培支援30年余 「森を守るコーヒー」次代へ

窪田県水巻町のカフェ「ウインドファーム」には、中南米やアジアなど16カ国で有機栽培されたコーヒー豆が集まる。運営会社代表の中村隆市さん(66)が現地の人々と協力し、30年以上かけて増やしてきた「森を守るコーヒー」だ。カフェは消費者に生産過程を知ってもらう場でもあり、環境保護に取り組む若者の雇用の場でもある。

「これはメキシコのナワット族」「これはタイのカレン族」。豆を手取る中村さんの頭には、生産者一人一人の顔が浮かぶ。

コーヒー栽培には通常、多量の農業や化学肥料が使われる。自然環境を守るためには有機栽培が理想的とはいえ、生産者にとっては容易ではない。中村さんは1980年代から生産地を巡って有機栽培を広め、適正な価格で買い支えるフェアトレードを行ってきた。

輸入した生豆は独学で磨いた技術で焙煎して国内各地のカフェに卸すほか、インターネットでも販売する。水巻町のカフェは今年4月に開店。生産者の取り組みを動画で紹介するコーナーも店内に設けた。



「ウインドファーム」の中村隆市さん。手にするのは家庭用焙煎器。「キャンプで焙煎を楽しむ人も多い」という

中村さんは19歳で水俣病患者と知り合ったのを機に、公害や環境問題に関心を持った。自ら農家となり、米や野菜の無農薬栽培を始めたが、思うように売れない。流通システムや消費者の意識を変える必要があると考え、福岡県内の生活協同組合に就職して有機農業の普及を推し進めた。

その間も、環境問題は世界規模で深刻化していく。「コーヒー栽培を通じて発展途上国に有機農業を広めよう」。再び独立すると、

提携できる生産者を探して南米を飛び回った。

93年、ブラジルの有機コーヒー栽培の先駆者カルロス・フランコさんと出会い、輸入販売を始める。これを起点に提携先は各国へ広がった。生産者を日本に招いて「国際有機コーヒーフォーラム」を開いたり、生産地を巡るツアーを開催したりと奔走した。

■関心は高まるが近年、環境保護への関心はこれまでになく高まる。国連の持続可能な開発目標（SDGs）を意識する企

■関心は高まるが

## 環境保護に取り組む若者を雇用

業が増え、スウェーデンの環境活動家グレン・トゥンベリさんの影響で取り組みに参加する若者も増えた。だが「学生時代に熱心に活動しても、卒業後に思いを生かせる仕事がない」。

中村さんはそんな若者の受け皿にと、水巻町のカフェで20〜30代の8人を雇った。キッチンカー3台で移動販売も開始。8月には福岡市にも新店舗を開く。

環境保護を事業として成り立たせるのは難しく、ふすま張りをして家計を支えた時期もある。近年は原料価格の上昇に加えて急激な円安で、輸入経費は増える一方だ。来月、泣く泣く生豆の値上げに踏み切ることにした。それでも生産者からの買い取り価格は下げないと決めている。

今こそ気候変動を止めなければ後戻りできなくなる。目指すのは「格差を生む経済から、みんなを幸せにする経済へ」。そんな世界を築き、次世代に託したいと思う。

（山田育代）

□ □

ウインドファームは午前11時〜午後6時、月曜定休。電話〇〇93（482）9555。

☐  
☐
$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

(山田育代)

【西日本新聞 2022年7月22日掲載記事】



レイジーマンコーヒー  
農薬・化学肥料不使用(タイ産)  
森林農法

● 中深煎り【150g】

口当たりは優しく、豊かなコクと甘味があり、ほのかに柔らかい酸味があります。後味にも甘さが長く続きます。



しない様子で準備を始める。やはり、ここはカフエではないのだ。でも、スウェヤやオシたちから村を見学してきたところだと聞いたのだろう、店主は俄然、機嫌がよくなった。タイ人であるこの男性は、親しくなったパペ村のカレン族の思いに共感、そのコーヒーを広める役割を担おうと、自力でこの店をつくり、卸も小売も手がけている。ハイウェイ沿いにあるこの店が窓口となることで、外部のものが無闇に村へと入っていくことを防ぎ、村の平穏を守ることにもなる、と彼は言うのだった。

スウェヤやオシが聞くところによると、この店のおかげもあって、毎年村で生産されるコーヒーは完売だ。今のところ、収量をあげる気はなく、むしろ、質を維持し、さらに向上することを大切にしている。この一見禁欲的な態度が、ノンタオでレイジーマン・コーヒーを手がけるスウェヤにとっては、コミュニティ・ビジネスの重要なポイントなのだ。コーヒーが売れて現金収入が増えたと、それに惹かれて、自給的な経済、コミュニティの協同、伝統的な暮らしなどがおろそかになってゆく。その例を、彼も、彼の父ジョニも、いやというほど見てきた。それも、タイだけで

ではなく、世界のあちこちで。

しかし、本連載で見てきたように、ノンタオでも、メーチェムでも、そしてドイツ・パペでも、若きコミュニティ・リーダーたちがこれまでとはちがう道を歩み始めている。単に過去に固執するのではなく、単に背を向けるものでもない。グローバル経済の罫をかくぐりながら、彼らは人類全体にとって重要なメッセージを世界に向けて送ろうとしているように見える。きつと彼らのコーヒーは、そのメッセージを乗せた小さな乗り物なのだ。

(その7に続く)



▲「ク」の畑を案内してくれたデプヌとピダ

## ■辻 信一（つじしんいち）プロフィール

文化人類学者、明治学院大学名誉教授  
環境＝文化NGO「ナマケモノ倶楽部」の代表として、「スローライフ」、「ハチドリの一ひとしずく」、「キャンドルナイト」、「しあわせの経済」などの社会ムーブメントの先頭に立つ。『スロー・イズ・ビューティフル』など著書多数。『レイジーマン物語ータイの森で出会った“なまけ者”』などのDVDブックシリーズ（現在9巻）を手がける。最新刊は『ナマケモノ教授のムダのてつがく』（さくら舎）。

